

特産守る女性農業者

「根日女みどり」をご存じでしょうか？学校給食にも出されている今が旬の野菜。加西市の特産である甘長とうがらしのブランド名です。大きさは20センチを超え、まっすぐに伸び、辛くないのが特徴です。

今回は、生産者で「根日女みどり研究会」の会長を10年以上務めている中村米子さんに、とうがらしに込められた思いを伺いました。



2022.8月「すっぴんかさい」

7月の初めには目立たなかったとうがらしも、梅雨が明けると一気に色づいて、空に向かって伸びていきました。到着し、真緑に実っているとうがらしを見ていると、しゃがみ込んで傷みや虫の被害がないか確認しながら手で取り、収穫作業に追われる中村さんの姿がありました。顔を見るなり「大きいやろ？このままでも食べれるんや」と屈託のない笑顔を見せる中村さんに、「傷みや変色にデリケートな野菜。栽培方法を改善していかない」とと神秘的な表情で話し始めました。

おすすめ分けが縁

「えっ、初めてなんですか？」。とうがらしづくりを始めたきっかけを尋ねた答えが予想外で、思わず聞き返してしまいました。

「自分が農作業をするなんて思ってもなかった。このとうがらしがきっかけなんです」と微笑む中村さん。約15年前に甘長とうがらし「根日女みどり」に出会ってから初めて野



“尻腐れ”症状が出たとうがらし。多くの生産者を悩ませる

菜を作り始めたといっています。「近所の人が、1回食べてみて、と持ってきたってねえ」と。料理が得意な中村さんは、油炒めにして食べてみました。すると、まったく辛味がなく「こんなにもおいしいとうがらしは食べたことがない」と感動。自分でも作ってみよう思い立ちました。

名前の由来にもなった鮮やかな緑色の果実は、まっすぐに伸びるのが特徴だそうで、大きさは20センチを超えます。

そうはいつても素人。野菜作りはしたことがなかったのに、JAの営農指導センター

へ行きまして。まずは土作りから始めたとい

野菜作りは土作り

根日女みどりの栽培は、霜が降りなくなる5月上旬からスタートします。農作業は夫婦で役割を分担しているといい、草刈りや、水の調整等、環境を整えるのはご主人で、中村さんは苗植えや収穫、出荷をしています。

最終的には、大人の背丈ほどまで育つので、苗を植えた後、1週間ほどしたら支柱を立て始めます。6月上旬には花が咲きはじめ、7月下旬から9月に収穫のピークを迎えます。

「おいしい」が励み

「採ってすぐは、生で食べてもおいしい」と、ほとんど農薬は使っていないという。農薬を使う回数を減らすため、病気になるにくいように気をつけていて「植える場所の配置や苗を植えた両脇の畝は虫が来ないよう、何も植えない緩衝地帯にしているんです」。続けて「アスパ」という有機肥料（米ぬかやもみ殻に、何種類かの肥料を混ぜたもの）を牛糞と一緒に混ぜて土づくりをしています」とおいしいさを追求するための工夫を話してくれました。

た。「その時は生の声が聞けるしね。そら嬉しかったですよ」と顔をほころばせました。

学校給食のメニューにもなっており、食べることがきっかけで、愛菜館に買いに来てくれる子どもも少なくないそうです。

減りゆく後継者

作り始めて約15年が経過。近年の異常気象で自身の努力ではどうにもならないことが出



学校給食で根日女みどりを食べる児童たち（賀茂小2年）

てきたといっています。特に今年は、例年より早く梅雨が明けたことにより日照りも多く、「尻腐れ」と呼ばれる症状が出ており、「切った食べれるんやけど、売り物にはならないんです」と作ったうちの半数は販売するには難しく、大きな痛手となっています。それが原因で根日女みどりの生産を諦めてしまう農家さんもいるのだそうです。

平成16年に設立された根日女みどり研究会は、当初は会員が20名ほどでしたが、今では片手で数えられるほどに減っています。生産者の多くは既に70歳を超えており、「コロナ禍の影響で、年に1回の会合もこの数年は中止に。出荷に行った際に出会えば話をしますが、それでも前みたいに話すことは減りましたね」と中村さん。横のつながりが薄くなってきており、このままでは、あと数年で加西の特産

求む若人の挑戦

「野菜がうまくできないときはもつやめようと思うけど、おいしいという声を聞いたらまた作ろうと思う。そうして今まで続けてきた」と、今年で81歳になる中村さん。昔は100本くらい苗を植えていたけれど、今は30〜40本くらいと、できる範囲で取り組んでいるといいます。また、野菜をつくるという目的があるから、今でも元気でいられると話しました。

年齢や体力的に、「自分の世界を守るので精一杯。手を広げることはようしませんわ」と笑うも、根日女みどり研究会の会長として、

たくさんの方に知って食べてもらいたい、この品種がなくならないようにしたいという思いは強く持っているといっています。

「作りたいという人がいたら教えます」。若い人の挑戦が、中村さんの現役続行の原動力になります。

キラリびと vol.16

中村米子 Yoneko Nakamura

昭和16年生まれ。65歳を過ぎてから根日女みどりはじめとする野菜を作り始める。楽しみは、主人と二人で季節の野菜を栽培し育てること。平成24年より根日女みどり研究会 会長。

すっぴんかさい 広報 8月

表紙	01
キラリびと 中村米子	02
マイナンバーカードをしよう	04
特集	
市政情報	08
TOPICS	
原油・物価高対策	08
市制55周年記念事業	09
イベントカレンダー	14
まちかどPHOTO★ニュース	16
くらしお役立ち情報	19
わくわく子育て情報	25
そうだ！図書館へ行こう	26
おくやみ／各種相談	27
とびだせ！かさいっ子	28
加西から広めよう世界の輪 みんなで使おう加西弁	

KASAI データバンク

R4.6.30 現在（前月比）

人口／42,532人（38）

男／20,851人（11） 女／21,681人（27）

世帯数／18,366（79）

6月の出生数／15人 死亡数／46人

●8/10、24は市民課・国保医療課窓口を延長（17:15～19:00）